

## 父母を語る

座間市支部 大越 幸雄（子）

戦没者 大越 善太郎

戦没地 インドネシア

昭和十二年頃、誰かの世話で世帯をもったらしい。昭和十五年十月二十九日長男幸雄誕生、母の実家で生まれたらしい。祖母は明治生まれの女傑。十六歳で嫁入りし二男七女を産んだ。今なら野球チームができるくらいのものだ。

平成四年、百歳で天寿を全うし、海部総理よりお祝いを頂いた。群馬県太田市では市を挙げてお祝いムードに包まれたと聞いた。

そんな祖母も病を得て入院を余儀なくされた折、私は祖母の見舞いに駆け付けた。同行したおばさんが「神奈川から幸雄さんがきてくれたよ。この子は母と二人で苦労したのだよ」と紹介すると祖母は一言「苦労は肥し」。それから私は泣き言を言わなくなった。

小学三年の頃、母が大病を患い国立相模原病院に入院した。脾臓の摘出手術を受けた。後年、聞いた話では執刀医が「あなたのお子さんを私の養子にする。だから安心して私に任せてほしい」手術が無事終了、しばらくしてから同じ病室での暮らしが術後の回復まで一年間継続し、小学校

と病院暮らしが始まった。母と二人での病院生活は、周囲の理解と暖かさが私を自由奔放にさせた。

座間小学校からの帰り、よく頼まれたのが肉屋での買い物であった。それは豚肉のレバーであった。病院食の他、増血作用のあるものを勧められたためでした。退院後、母は神奈川県の利用員に採用され定年まで公務員として勤め上げたが、大病後の無理が災いしたのかまもなく他界した。享年六十歳。

そんな母が若いころ、銀行頭取の住み込みのメイドさんとして働いていた時があったので、当時ハイカラなマージャンを教え込まされていた。それが思わぬところで役に立った。

私が夜学の帰り、家に着くと賑やかな音がして私の部屋がマージャン部屋と変身しているではないか、見ると近所の大学生と母がパイを囲んでいる。こんなことを何度も見ているので、ああまたか。そんな母をいまは懐かしく思い起こさせる。

父の思い出が意外なところで判明した。父の同僚で相模原に住まいするKさんがJR相武台下駅近くのスナックで私と同席、互い初対面ながら名刺の交換をすると何たる偶然か、私は若いころラグビーをやっていました。彼の息子もラグビーをやっていた。その上私の父をよく知っている。「貴方のお父さんは偉かったよ。軍隊で部下の制裁はびんたが当たり前なのに、貴方のお父さんは決して手は出さずただ教え諭すだけであつた」と。それを聞かされた私は、我慢強い母と温厚な父を誇りに思っております。